

に細川幽斎が詠んだそつ
な。太閤さんが感心して言

われたところ、それまで
黙っていた曾呂利新左衛

門が「ちよつと待つてく
新左衛門が褒美をもつ

解説

「はあ、はあ、こりや
もつたといつ話。

語り手 山口忠光さん
(明治40年生まれ)
昭和63年8月23日収録

あらすじ

「よし、それはいいが
ここに集まつたる大名」
人ずつ大きな歌を詠め
それから次から次に大

名が詠んだ。一番しまい
らせる」

「天と地を 団子に丸め
喉にさわらず
ぐつと飲めども
だきい。わたくしもやり

ましたら、今度は太閤
天と地を 团子に丸め
飲む人を 鼻毛の先で
吹き飛ばしけり

と詠んだのだそうな。
それから、ある大名が、
髪の毛を
千筋に割いて

昔、太閤さんが日本國
中の殿さんを集め、どの
大名にも「歌を詠め。おま

えたち歌というものは
どういつわでできるの
か」とて聞かれたそつな。

人が「それは山と言
わんでも山と思わせ、川
と言わいでも川と思わせ
るように作るのが歌でござ
ります」と答えたそ
な。

太閤さんの歌比べ

(東伯郡三朝町大谷)



イラスト・福本隆男

大名に歌詠ませる

「おう、そつか。そ
じやあ土から出こぶて言
つたら山になるか」と言
われる。

家来は「それは考え方
でなりましよう」と言つ
た。

「うーん、これもいい
歌だ。褒美を取らそう
か」。また、「待つた、
待つた」と言つので、ま
た一人が、

蚊のこぼす 涙の海の
浮島の 真砂拾い
千々に碎かん
「うーん、これもりつ
ぱな歌である。これは甲
乙言わずに双方に褒美を
取らせる」つていうとこ
ろで、それぞれが褒美を

「うーん、これもいい

4人のほう吹き。(a)

歌だ。褒美を取らそう
か」。また、「待つた、
待つた」と言つので、ま
た一人が、

天に達する大木。(b)

城を建て
百万えきの籠城をする

天に達する大木。(b)

天にとどく大男。(d)

富士をまたぐ大牛。(c)

胴辺り三百里の太鼓。

太鼓はその大木でつく

り、その牛の皮を用い、

その大男にたたかせると

いつて、最後の男が勝つ。

このような話なのであ

る。

が、関敬吾『日本昔話大成』では、直接関連のあ
りそうな話型は見つから
ないようだ。ただ、ある
程度関わりのありそうな
ものとしては、「笑話」
の中の「巧智譚」に属し、
さらに「業較べ」に分類
されている。「小さい較
べ」と「法螺較べ」に当
てはまるようだ。後者を
紹介する。

4人のほう吹き。(a)
天に達する大木。(b)
富士をまたぐ大牛。(c)
天にとどく大男。(d)

(元鳥取短期大学教授)
(水曜日に掲載)